

シャトー・メルシャン

シャトー・メルシャンは日本でも有名なワインブランドで、輸出もされています。山梨県甲州市の宮光園の隣には、シャトー・メルシャンのワインギャラリーとワインミュージアムがあります。1904年に建てられた日本最古の木造ワイナリーの建物に収蔵されています。館内には、日本のワイン醸造の黎明期に使用されていた道具や器具が多数展示されています。

日本のワイン産業の変遷を詳細に展示しています。また、大黒ワインの創業者である宮崎光太郎が作成した広告資料も展示されています。宮崎氏の会社は、日本の一般消費者へのワインの普及・販売にいち早く成功した会社です。

シャトー・メルシャンの歴史

1877年（明治10年）、甲州地方の実業家である高野正誠（1852～1923年）と土屋龍憲（1858～1940年）が大日本山梨葡萄酒会社を設立したのが、日本のワイン産業の始まりです。創業者の二人はフランスに渡り、フランスのワイン造りを学びました。帰国した二人は、学んだワインの渋みが、日本人が慣れ親しんだものとはかけ離れていることを知りました。日本はまだヨーロッパのワインを受け入れる準備ができていなかったため、1886年に廃業してしまいました。

甲斐産ワインと大黒ワイン

正誠と龍憲が築いた基盤を利用して、大日本山梨葡萄酒会社の元株主であった宮崎光太郎は、自分の会社を立ち上げることを決意。大日本山梨葡萄酒会社の設備を購入し、土屋龍憲、土屋保幸の兄弟とともに甲斐産ワイナリーを開業しました。

1888年（明治21年）にはマーケティングに力を入れることを決め、東京にワインショップと営業所を開設しました。しかし、1889年～1890年頃に宮崎と土屋兄弟は提携を解消。その後、宮崎は富と商売の神様である大黒天をイメージして「甲斐産ワイン」をリブランディングしました。1891年、宮崎はこの商標を登録し、大黒ワインは日本で最も人気のあるワインの一つに成長していきます。

シャトー・メルシャン設立

1949年、シャトー・メルシャンは単に「メルシャン」として設立され、日本では甘口ワインからより洗練された辛口ワインへの移行の先頭に立ちました。1940～50年代は甘口のワインが好まれていましたが、1964年の東京オリンピックに合わせて辛口ワインの世界的な嗜好が好まれるようになりました。

17年の歳月をかけてワイン造りの技術を磨き、会社を設立したメルシャンは、1966年に国際ワインコンクールで日本のワイナリーとしては初めて金賞を受賞しました。これにより、日本ワインが世界的に注目されるようになりました。高野、土屋、宮崎の3人が築いてきた基盤の上に、メルシャンは日本のワイン業界で高い評価を得ることができました。

1970年にシャトー・メルシャンと改名し、1976年にはメルローを原料としたワインの生産を開始しました。1984年には、メルローワインの販売に成功した後、カベルネ・ソーヴィニヨンワインの生産を開始しました。

その成功に伴い、2006 年、シャトー・メルシャンは大手飲料メーカーの麒麟ホールディングスに買収され、事業を拡大していきました。

現在では、シャトー・メルシャンは日本全国にブドウ畑やワイナリーを持ち、国内でも知名度の高いワインブランドの一つとなっています。シャトー・メルシャン博物館は、旧大黒ワイナリーに併設されています。明治時代のワイン造りの道具や樽などで埋め尽くされています。館内には英語の看板があります。